

出典・根拠



写真 大宮川
平成 9年 8月 5日
大宮川橋(大津市下阪本 6丁目)での被害



写真 藤ノ木川
平成 9年 8月 5日
作り道(大津市坂本 4丁目)での被害



写真 三田川
昭和 57年 7月 31日 ~ 8月 2日

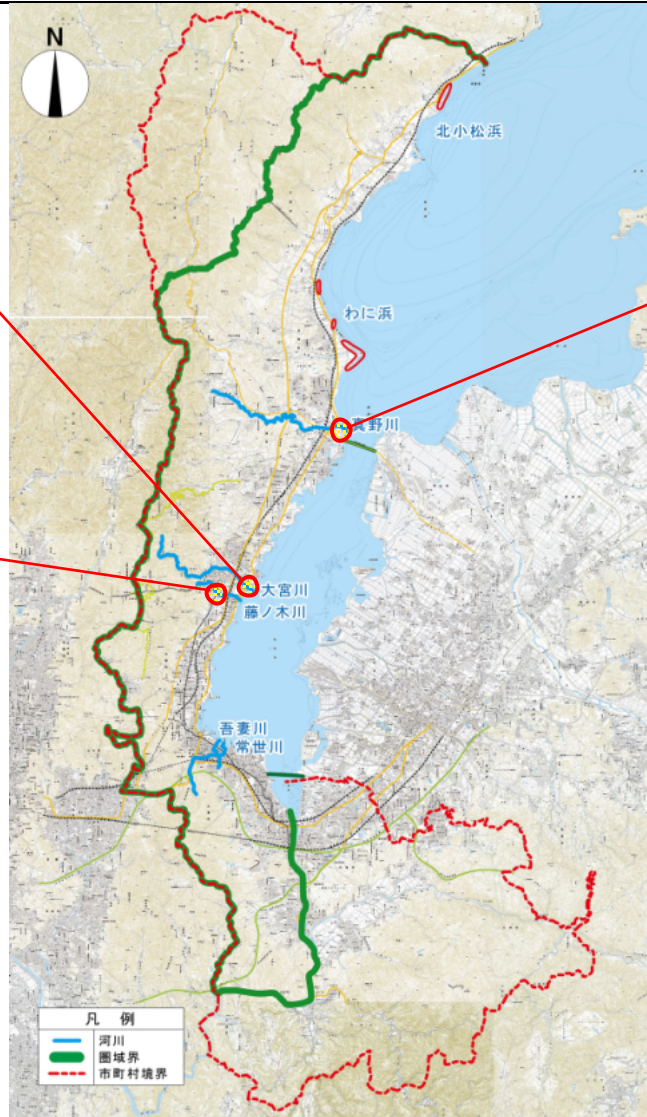


写真 真野川
昭和 51年 6月
国道 161号下流(大津市今堅田 3丁目)



写真 常世川
昭和 43年 7月 5~6日
大津市内での被害

河川整備計画（本文）

（治水事業の沿革）

このような洪水の被害を軽減するため、河川改修事業や災害復旧事業などにより、河川の改修工事や護岸の復旧工事などを行ってきました。特に昭和 47 年から開始した琵琶湖総合開発事業により、河川改修の投資額が大幅に伸び、圏域内の河川改修は大きく前進しました。

真野川の改修は、災害復旧事業など護岸の復旧工事を主体として実施してきました。しかし、川幅が狭く、流下能力が大きく不足していることから、平成 6 年度から河川改修事業全体計画を策定のうえ、事業に着手しました。その後事業用地の取得を進め、現在は河口部から改修工事を行っています。

大宮川は、昭和 48 年に大宮川・足洗川あしあらいがわの 2 河川を統合する大宮川放水路の計画を策定し、事業に着手しました。このうち河口から JR 湖西線付近までの約 700m 区間を琵琶湖総合開発事業により改修し、足洗川については平成 14 年に大宮川放水路への取り付けを完了しました。現在では、大宮川の大宮川放水路への取り付け区間である、約 500m の工事を進めています。

藤ノ木川は、昭和 45 年に事業に着手し、琵琶湖総合開発事業などにより河口部から上流約 780m 区間の改修を完了しています。現在では、人家密集地の湖西道路上流部から市道幹 2120 号線（つくり道）間の 720m が未改修区間となっています。

常世川は、昭和 51 年に事業に着手し、常世川および吾妻川の 2 河川を統合するトンネル河川として琵琶湖総合開発事業などにより常世川合流点より上流約 140m までの区間が平成 10 年度に完了しています。現在では、改修済みのトンネル河川に常世川および吾妻川を暫定的に取り付けています。

相模川、盛越川など 8 河川の治水対策として、国の直轄事業である大津放水路事業が進められています。大津放水路事業は、洪水時の各河川からの流水を中央自動車道西宮線（名神高速道路）沿いに設けた分水工から放水路トンネルへ導き、瀬田川へ放流しようとするもので、平成 17 年 6 月に瀬田川から盛越川までの第一期工事が完成し、通水されたことにより、盛越川から諸子川までの上流第二期工事の早期実施が望まれています。

出典・根拠



河川整備計画（本文）	出典・根拠
<p>（治水上の課題）</p> <p>災害復旧事業や計画的な改修事業を進めてきたことにより、大規模な洪水被害は減少していますが、近年、全国各地で気候変動による集中豪雨が頻発していることから、河川の施設能力を上回る洪水（以下、超過洪水という）が発生する危険性が增大しています。</p> <p>また、圏域の市街化の進展や交通網の整備などにより人口・資産の集中が見られるなど堤内地の土地利用の高度化が進んでいます。</p> <p>さらに、これまでの洪水対策では、河川管理者による取り組みだけでなく、住民による自主的な判断や自助活動として、地域防災力の中心・中核を担う消防団による活動が重要な役割を担ってきましたが、核家族化による水害に対する知恵の伝承の断絶などや団員の高齢化やサラリーマン化による組織の弱体化が見られることから、治水に関する関心が低下する状況にあります。</p> <p>このように全体として地域防災力が低下し、水害発生時の被害ポテンシャルが高まっており、今後とも生命の安全確保と財産の保護が急務となっています。</p> <p>改修が進んでいる箇所においても、護岸の老朽化や背後地の利用状況の変化により、水衝部などで危険性が確認された箇所に対しては、個別の対応策として、堤防の質的強化やはん濫制御を図る対策も併せて進めていく必要があります。</p> <p>こうしたことから、県民の命を守り壊滅的な被害をできるだけ少なくするため、これまでの川の中の対策に加え、自助・共助・公助を組み合わせた川の外の対策を推進し、効果的に治水安全度を高める取り組みを進めていく必要があります。</p>	

河川整備計画（本文）

真野川は河積が小さく、はん濫原には、国道 161号、湖西道路、国道 477号、JR 湖西線などの多くの交通網が通っており、交通の要衝となっています。また、下流は、密集市街地であり、人口や資産が集中しているだけでなく、娯楽施設や商業施設なども多く存在しています。さらに当地区は近年、京阪神のベッドタウンとしての市街化が急激に進んでいることから、洪水時には深刻な被害が発生するおそれがあるため、浸水被害の低減を図るとともに破堤による壊滅的な被害を回避する必要があります。

出典・根拠

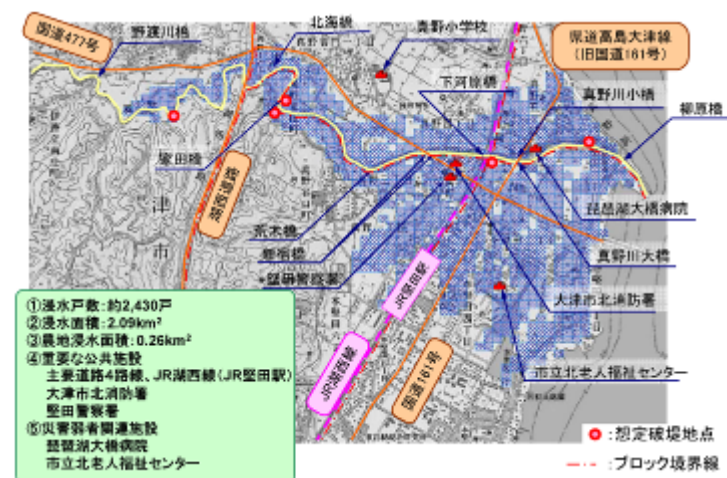


図 真野川のはん濫原

出典：平成 21 年度第 3 回滋賀県公共事業評価監視委員会 資料 2-2 P8

河川整備計画（本文）

大宮川は河積が小さく、はん濫原には、国道 161 号、湖西道路、JR 湖西線など主要な路線が通っており、下流は密集市街地であり、人口や資産が集中しているだけでなく、中流部には日吉大社などの保全すべき歴史・文化的な建造物が存在しています。また、密集市街地を天井川が蛇行しながら流下していることから、洪水時には深刻な被害が発生するおそれがあるため、浸水被害の低減を図るとともに破堤による壊滅的な被害を回避する必要があります。

出典・根拠



図 大宮川のはん濫原

出典：平成 22 年度第 4 回滋賀県公共事業評価監視委員会 資料 3-2 P6

河川整備計画（本文）

藤ノ木川は河積が小さく、はん濫原には、国道 161 号、湖西道路、JR 湖西線や京阪電鉄石山坂本線など主要な路線が通っており、中・下流は密集市街地であり、人口や資産が集中しているだけでなく、世界遺産に登録された延暦寺と深い関係のある寺院や里坊など保全すべき建造物が多く存在しています。また密集市街地を天井川が流下していることから、洪水時には深刻な被害が発生するおそれがあるため、浸水被害の低減を図るとともに破堤による壊滅的な被害を回避する必要があります。

出典・根拠

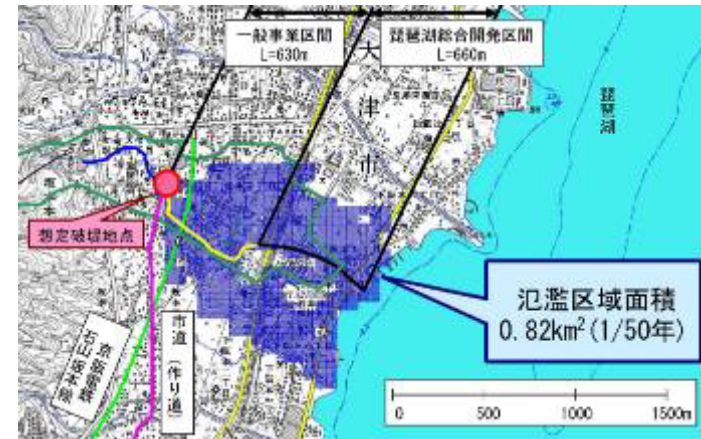


図 藤ノ木川のはん濫原

出典：平成 20 年度第 6 回滋賀県公共事業評価監視委員会 資料 5-1

河川整備計画（本文）

常世川・吾妻川は河積が小さく、はん濫原には、人口、資産が集中する県都大津市の中心市街地があるほか、国道1号、JR東海道本線（JR琵琶湖線）、京阪電鉄石山坂本線などの主要交通幹線が通っており、また県庁など重要施設付近や密集市街地を蛇行しながら流下していることから、洪水時には深刻な被害が発生するおそれがあるため、溢水による被害を軽減する必要があります。

出典・根拠



図 常世川・吾妻川のはん濫原

出典：平成20年度第6回滋賀県公共事業評価監視委員会 資料5-1

河川整備計画（本文）

1.2.2 利水に関する現状と課題

圏域内の河川水は、かんがい用水や飲料用以外の生活用水などに利用されています。また、圏域内の水道普及率は99.9%（平成21年3月末現在）となっており、そのほとんどが琵琶湖の水を利用しています。

真野川の河川水は、大野地区、^{いえだ}家田地区、中村地区、沢地区、北村地区、今堅田地区などの主に農業用水として利用されている他、飲料用以外の生活用水や防災用水としても利用されています。農業用水に利用された水は、真野川に還元される他、用水路を經由して直接琵琶湖に排水されるものもあります。

大宮川の河川水は、沿川農地の農業用水に利用されている他、飲料用以外の生活用水や日吉大社や旧竹林院の池泉としても利用されています。

藤ノ木川の河川水は、下流部を除き、平常時の水量がほとんどないこともあり、農業用水への利用はされていませんが、沿川里坊の寺院の池泉に利用されています。

常世川・吾妻川の河川水は、市街地を流下しており、農業用水への利用はなされていません。

相模川、盛越川など8河川の河川水は、中・下流域に残された水田の農業用水として、地域の貴重な水源として古くから利用されています。

現状では、流況や利水量が正確に把握できていないところもあります。平常時の流水が河川環境に潤いを与えていることの認識のもと、平常時かつ湯水時において、地域住民と連携しつつ流況の把握に努める必要があります。

なお、天井川の切り下げや新川の掘削など地下水への影響が想定される河川については、地下水水位への影響についての調査が必要です。

出典・根拠

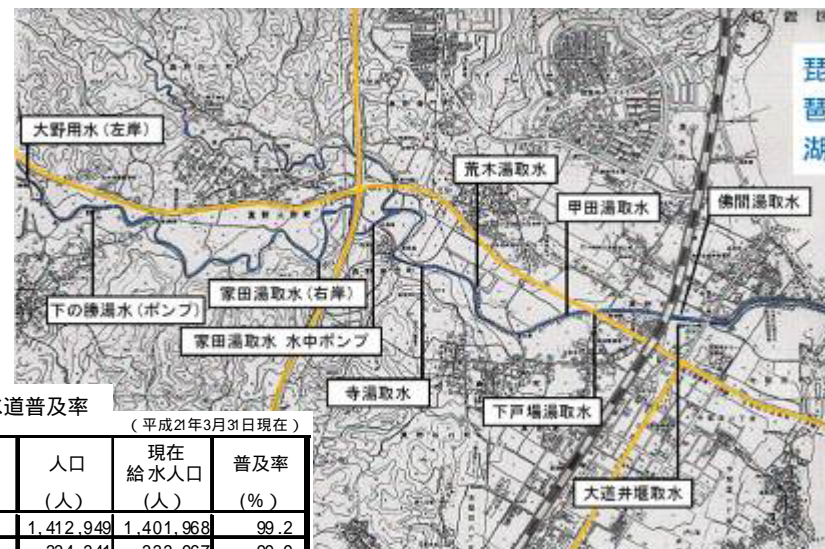


表 水道普及率 (平成21年3月31日現在)

	人口 (人)	現在 給水人口 (人)	普及率 (%)
滋賀県	1,412,949	1,401,968	99.2
大津市	334,341	333,967	99.9

出典：平成20年滋賀県統計書

図 真野川の取水の状況

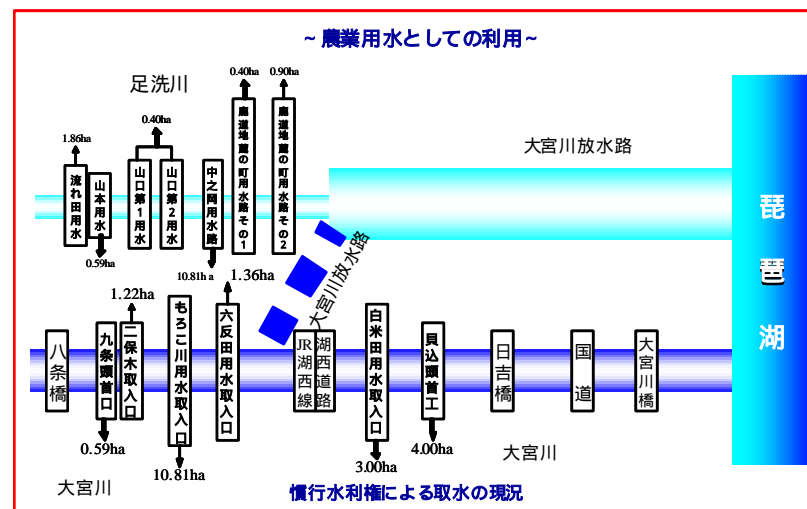


図 大宮川の取水の状況